

後宮の料理妃2
皇后の試練と夫婦の契り

及川 桜 Sakura Oikawa



アルファポリス文庫

目次

序章	
第一章	初夜
第二章	皇后の壁
第三章	美貌の宦官
第四章	臆病な神龍
第五章	真夜中の厨房
第六章	上元節
第七章	混沌 こんとん
第八章	癒しの料理
第九章	宿命の対決
終章	蜜月
	299
	257
	234
	213
	175
	156
	114
	79
	44
	7
	5

序章

（え、待って……これって……これって……）

劉赫^{りゅうかく}がまぶたをゆっくりと伏せながら、迫り寄る。

男だというのに、なんだこの色気は。

整った顔立ちはどこを見ても美しく、近づくほどに、雪蓉^{せつよう}の胸の奥で波が重なり合うように鼓動が高まっていく。

突然訪れた甘い展開。

しかも、真後ろには大きな寝台が控えている。

（わかつてる！ わかつてるけど〜！）

——今宵^{こよひ}は、初夜。

先ほどまで政治の話をしていたのですっかり忘れていたが、皇后として最も大事な仕事があるではないか。

皇位継承者を産むこと。それが、雪蓉に課せられた義務だ。

皇后になると決めた時から、こうなることは当然覚悟していた。

最初は、劉赫に無理やり後宮に連れてこられたので反発していた。そして、劉赫の失われた味覚を取り戻せたなら山へ帰すという約束を果たし、一度は離れた。

けれど、その頃にはもう、どうしようもなく彼に惹かれていた。

窮屈な後宮暮らしも、数多の妃を抱える皇帝を好きになるという葛藤も、全て受け入れた上で、それでも後宮へと戻ってきたのだ。

劉赫は雪蓉への想いが本物だと示すため、皇后という皇帝に次ぐ最高位を与えてくれた。

嫌なわけではないのだ。

どんなことがあっても彼と共にいたいし、劉赫を守るためなら命さえ惜しくない。

それほど真剣な想いであり、生半可な気持ちでは決していない。

……ただ、久しぶりに再会したと思ったらもうこの展開だ。

愛されているということは伝わっている。

それでもまだ、心が追いついていない。

雪蓉は固く目を閉じ、唇をぎゅっと引き締めた。

第一章 初夜

「お待ちください」

意気揚々と後宮の大門を渡ろうとした雪蓉は、門番の声に足を止めた。

数名いる門番のうちの一人は、雪蓉の手にある皇帝の龍紋を刻んだ玉牌ぎょくはいに視線を落とし、次いで訝いぶかしむように顔を上げた。

「……失礼ですが、本当に皇后様で？」

「そうよ。私は潘雪蓉。皇后になるために、後宮へ戻ってきたの」

雪蓉は胸を張って言った。

近く皇后が後宮に入るという話は、門番も耳にしているのだろう。怪しみながらも、それでも疑いは晴れないのか、門番は今度は雪蓉の全身に視線を走らせた。

色あせた藍色の漢服。腰元まで届くやわらかな黒髪には、飾り一つもない。

この出で立ちで皇后だと名乗っても、信じてもらえないのは仕方のないことかもしれない。

（困ったわ。玉牌があれば問題ないと思っていたのに、まさか門前で足止めされるなんて）

劉赫が手配してくれようとしてくれた豪華な輿や衣装を断ったことを、雪蓉はここへ来て少しだけ後悔する。

今さらどうしようもないが、まさか後宮に入れない展開になるとは思ってもみなかった。

「……おい、本当に皇后様だと思うか？」

「だが、雪のように白い肌に、宝珠のように大きな瑠璃色の瞳……。たしかに絶世の美女ではある。身なりは酷いものだが」

門番たちは声を落として相談しているつもりなのだろうが、あいにく雪蓉は地獄耳だ。

「皇后になられるお方は、もとは饕餮山の巫女で、陛下に召し上げられて貴妃になったとか」

「それでもない怪力が原因で貴妃を免ぜられ、山へ戻ったって話だぞ。だが、料理の

腕を見込まれて、今度は皇后になるらしい」

「料理？ 皇后になるのに、料理は関係あるのか？」

（ちょっと待って。最初は合っていたけど、途中からまったく違う話になっているじゃない！）

真実はこうだ。

饕餮という悪の霊獣に料理を捧げる巫女として、山で暮らしていた雪蓉は、ある日瀕死の男を助けた。

彼は皇帝・劉赫で、雪蓉の料理を気に入ったことをきっかけに、後宮へ無理やり連れて行つた。そこで貴妃となった雪蓉は、失われた彼の味覚を取り戻したあと、約束通り山へ戻る。

その時点では、互いの想いに気づかないまま、すれ違っていたのだ。

ほどなくして、劉赫が山を訪れる。

素直じゃない彼が真剣に想いを伝え、雪蓉を皇后に迎えると告げた。

こうして互いに両想いだったと自覚した雪蓉は、今度は皇后として再び後宮へ戻ってきたのである。

（私の料理には巫女の力が宿っている。それに、たしかに怪力だけれど、貴妃を免ぜ

られたわけじゃないし！」

「確認してまいります。しばしここでお待ちください」

詳しく説明しようと口を開きかけた雪蓉だったが、門番の言葉に口を噤んだ。

後宮には、雪蓉の顔を知っている者も多い。余計なことを言うより、状況がわかる者に聞いてもらった方がいいだろう。

路肩の石に腰を下ろし、大人しく待っていると、やがて分厚い後宮の大門が開いた。中から現れたのは、数名の女官たちだ。

彼女たちは一様に高髻こうけいを結び、上質な絹をまとって、能面のように表情を崩さず歩いてくる。

その先頭を歩く年輩の女官に、雪蓉は見覚えがあった。貴妃だった頃、雪蓉付きだった女官である。

もつとも、ほとんど放っておかれていたため、彼女との関わりは薄い。

女官は雪蓉の身なりを見るなり、露骨に顔をしかめた。

嫌悪感を隠そうともしていないその表情は、能面のように感情を殺した顔より、よほど人間らしく見える。

「あの……こちらの方は、本当に皇后様であられますか？」

門番が恐縮し切った様子で女官に問いかける。彼女の放つ高貴な威圧感に、すっぴりのまれているようだ。

「……ええ。残念ながら、此度皇后に冊立さふりされます潘雪蓉殿に相違ございございません」

（残念ながらって、なに!）

雪蓉は心の中で即座に突っ込んだ。

本来なら、このような無礼な口ぶりは罰せられてもおかしくない。だが、雪蓉はそうしたことはいちいち気にする性格ではなかった。

（相変わらず性格が悪いようで、元氣な証拠でなによりです！）

心の中で、久しぶりの挨拶あいさつを投げておく。

口に出せば厄介なことになるのは、さすがに雪蓉もわかっている。それに、世話を焼かれなかった方が、あの時の雪蓉にとってはありがたかったというのもある。

「では、こちらへ。皇后宮までご案内いたします」

女官たちは踵かかひを返し、再び後宮の中へと歩き出す。

雪蓉はなにも言わず、その後ろについていった。

劉赫の真つ直ぐな求愛により、二人が両想いになってから、すでにふた月あまりが過ぎていた。

雪蓉を皇后として迎えるため、その間、宮中では着々と準備が進められていたのだらう。久しぶりの後宮は、以前よりも活気に満ちていた。

時が経ったとはいえ、まるで別の場所に足を踏み入れたかのようだ。女官や下女の数があきらかに増え、以前はいなかった宦官たちの姿である。

後宮嫌いの劉赫によって、宦官は一掃されたはずだったが、いつの間にかもとに戻っているらしい。

(私の……せい?)

思い当たることはいくつもあった。

男がいない後宮には怪力の雪蓉を抑えられる者がおらず、ある意味野放し状態だった。気楽でいいわ、と当時は思っていたが……やはり、それでは駄目だったのだろう。新しく建てられたらしい殿舎を横目に、雪蓉は能面のように口を閉ざした女官たちのあとに続く。やがて、皇后宮へ辿り着いた。

高くそびえる朱塗りの楼閣。

青磁色の瓦が陽光を受けて煌めき、まるで天上の宮のように輝いている。

(……え、ここに私が住むの?)

皇后宮の大門の前で、雪蓉はぽかんと口を開けたまま固まってしまった。

ついこの間まで饕餮山の巫女だった自分には、どう見ても場違いすぎる住まいだ。

(これは……どう見ても人の住む規模じゃないわ)

そう内心で突っ込みながら、大門をくぐる。

貴妃の宮殿も十分に立派だったが、皇后宮はその比ではなかった。皇帝の正妻である皇后の権勢が、そのまま形になったような規模だ。

街区一つ分ほどある敷地は、視界の端から端まで華やきに満ちている。

中央には堂々たる池亭があり、冬枯れの蓮の茎が真っ直ぐに伸び、池面に影を落としている。

池の畔には太湖石が配され、彩釉の獅子像や二彩の小さな香炉が点々と飾られていた。

さらに、丹念に手入れされた山茶花や蠟梅の花壇が宮全体を美しく彩っている。

そして、取り囲む建物群も圧巻だった。

侍女たちの宿舎らしき棟、湯殿、専用の厨房——どれもが贅を凝らした造りである。

田舎者そのものの顔で圧倒されながら見回していると、先頭を歩いていた女官がふいに立ち止まり、振り返った。

それを合図にしたように他の女官たちも一斉に振り返る。

「皇后宮の中には、すでに選抜された侍女たちが待機しております。わたくしの役目はここまでですので、これにて失礼いたします」

能面のように感情の欠片もない声で言い、女官は頭を下げる。

(……普通、中へ案内して侍女に引き渡すまでが仕事じゃないの?)

しきりに疎い雪蓉でも、そのくらいはわかる。

どうやら皇后となって戻ってきてても、女官たちの態度は変わらないらしい。

とはいえ、その程度で雪蓉がくじけるわけなどない。

「そう。ここまで案内してくれてありがとう」

不快さを少しも見せず礼を述べると、女官たちは一瞬だけ目を見開き、すぐに元の能面へ戻り、去っていった。

広大な皇后宮。見上げるほどの楼閣を前に、雪蓉は一人佇む。

(饗饗襲来の一件で態度が軟化したように思っていたけれど……。妃の位を捨てて巫女に戻った私が、また皇后になって戻ってきたんだもの。そう簡単に受け入れられるわけないか)

雪蓉は小さく息を吐いたあと、背筋をしゃんと伸ばした。

(上等よ。味方が一人もいなくても負けないんだから)

勝ち負けの話ではないとわかっているが、心の奥でそっと気合を入れる。劉赫と共に歩むと決めた以上、艱難辛苦が待ち受けていることなど織り込み済みだ。

楼閣の正面には、白玉石を数段積んだ階が緩やかに伸びている。その先には、瑞雲を刻んだ金具が光る朱塗りの両開き扉がそびえていた。

雪蓉は深呼吸一つして、勢いよく扉を押し開けた。

「ごめんくださいませ〜!」

雪蓉は腹の底から声を張った。

皇后としての最初の挨拶がこれで良いのかはわからない。いや、おそらく良くない。それでも、他に言葉が浮かばなかったのだから仕方がなかった。

扉を開き切り、真っ先に視界に飛び込んできたのは、整然と二列に並ぶ侍女たちの姿だった。ざっと二十名はいるだろうか。どの顔も若く、整っている。

彼女たちの衣装はお揃いだった。淡い桃色のやわらかな上衣には細かな刺繍が施されており、袖の光沢が緩やかに波を描いている。

裾までゆつたりと広がる長裾は淡金の帯で高く結ばれ、帯に下げた玉飾が揺れていた。

髪形は高く結った高髻の者もいれば、背中に流した者もあり、同じ衣装を着てい

も個性が見られる。

そんな侍女たちの前に、妙な挨拶と共に乗り込んでしまった雪蓉。あきらかに場違いで、さすがの雪蓉も恥ずかしくなる。

若き美女たちの視線が一斉に雪蓉へ注がれた、その瞬間。

「娘々、お待ちしておりましたー！」

「きゃあ、本物だわー！」

黄色い歓声が一斉に弾けた。侍女たちは胸の前で手を合わせたり、互いの腕を掴んで小刻みに跳ねたりしている。

彼女たちの喜びの空気に、雪蓉はあぜんとしたまま立ち尽くした。

（……これは、いったいどういうこと？）

冷たい対応を覚悟して扉を押し開けたというのに、まさかの熱烈歓迎。

予想と真逆の歓迎ぶりに居心地の悪さを覚え、雪蓉は回れ右をして扉の外へ逃げ出したい衝動に駆られる。

すると、一人の侍女が前へ進み出て、がしりと雪蓉の手を掴んだ。

「お帰りを心の底からお待ちしていました！」

熱のこもった眼差しを向けてくるその少女は、双髻^{そうけい}を結び、小動物のように愛らし

い顔立ちをしている。

「あなたは……銘々^{めいめい}？」

貴妃時代、下女として働いていた少女だ。よく転んでいたので、印象に残っている。

「覚えていてくださったんですね！……っ」

銘々は弾んだ声を上げたかと思うと、感極まったように言葉を失った。

そして、小さな肩をかすかに震わせる。

「……雪蓉様、会いたかったです」

ぼろり、と涙を零し、そのまま声を上げて泣き出してしまった。

状況がまったく呑み込めない雪蓉は、とりあえず銘々の背に手を当て、あやすようになでた。

（そういえば……この子はよく泣いてもいたわね）

背中をぼんぼんと叩きながら、雪蓉は問いかけた。

「どういうことなの、銘々。どうしてあなたがここに？」

「雪蓉様が皇后になられるにあたって、後宮で侍女を募集していたのです。もちろん、真っ先に手を挙げました！ 雪蓉様に助けていただいたこの命……雪蓉様に捧げる覚悟で、精一杯お仕えいたします！」

涙で頬を濡らしたまま銘々は胸を張り、力強く言い切った。
すると他の侍女たちも口を開く。

「……わ、わたくしも自ら志願いたしました！ 饗餐との戦いのお話は、胸が震えるほど感動いたしました。後宮には娘々を怖れる者もおりますが、わたくしは心より尊敬しております。娘々の侍女になれたこと、光栄の極みにございます！」

「わたくしもです！」

「わたくしも、お慕い申し上げます！」

次々と声が上がリ、あつという間に雪蓉を中心に輪ができた。

饗餐との戦いとは、後宮を統べていた麗鳳妃れいほうひが使役する鴉からすによって饗餐の結果が破られ、後宮が襲われた一連の出来事のことだ。

混乱の中、先頭に立ったのは雪蓉だった。後宮の者たちを速やかに避難させ、自ら饗餐と対決したのだ。

料理の巫女としての力で饗餐を眠らせるが、その直後、悪神・蚩尤しゅうが姿を現す。

蚩尤は呪詛で神龍を操り、劉赫の兄たちを死に追いやリ、さらに麗鳳妃を洗脳して饗餐の結果を破らせた黒幕だった。

劉赫は神龍と共に満身創痍でこれを討つ。

この戦いを経て、平民出身ゆえに疎まれていた雪蓉への評価は大きく変わった。

彼女の勇敢な行動によって多くの女性たちが救われ、その一部から熱心な支持を集めるようになったのである。

彼女たちの熱量に圧され、雪蓉は口の端をひきつらせながら笑みを返す。

(……これはこれで、やりにくいっらないわ)

貴妃の頃のように無視されて放置されるのも困るが、ここまで熱烈なのも戸惑ってしまう。

とはいえ、下女だった銘々が侍女となり、こうして見知った者が側にいてくれるのは心強い。

仙婆せんばや小さな巫女たちと離れ、胸の奥には寂しさもあった。

どんな状況でも耐えてみせると気を張っていたが、温かく迎えてくれる者がいるのは、素直にありがたかった。

どうなることかと不安だった後宮暮らしも、上手くやれそうな気がしてきた雪蓉だったが、そう甘くいくはずもないことを、このち痛感することになる。

絢爛豪華に飾られた宮城に、低い鼓の音が響きわたる。

雪蓉が後宮へ戻った翌日、早くも大舞台が整えられていた。

婚礼衣装に身を包んだ雪蓉は、侍女たちに導かれながらしずしずと回廊を進んでいく。

かつて貴妃として迎えられた際にも儀式はあったが、今回は皇后となる儀礼。衣装も作法も、そして儀式の規模も、あの時とは比べものにならない。

深青色を基調とした大袖の翟衣は、胸元と裾に金糸で織り込まれた雉の文様が冴え、歩くごとに光を返した。

頭上には鳳冠が据えられ、翡翠を惜しげもなくちりばめた円笠に、鳳凰や大花十二樹の飾りが揺れ、しゃらりと澄んだ音を立てる。

広大な宮殿の広場では、楽人たちが荘厳な旋律を奏で始め、諸王百官が整然と並び立っていた。

その奥、開放たれた正殿には、皇帝・劉赫が玉座に静かに座している。

最上位の格式を示す十二旒の冕冠を戴き、十二種の文様が施された玄色の袞衣をまとったその姿は遠目にも凛としていて、神々しかった。

雪蓉は玉座の下へと進み、諸王百官の視線を浴びながら、冊命の宣詔に耳を傾けた。続いて冊使が進み出て、金印と玉冊を彼女の前へ差し出す。手にしたそれはひんやりとしていて、手の平にずしりと沈んだ。

冊宝を受け取った瞬間、殿内の諸官が一斉に地へ額をつけた。

「――皇后陛下、万歳！」

百人以上の声が重なり、殿が震えるほどの響きが巻き起こる。

そこで雪蓉はようやく自分が皇后となったことを実感し、肌が粟立った。

貴妃として婚礼を行った時は、どう逃れるかばかり考えていた。

けれど、今は違う。

劉赫と共に生きると決め、この場に立つことを自ら選んだ。

しかし、真の意味ではわかっていなかったのかもしれない。

劉赫が好きだから皇后になる――そんな甘い気持ちだけで務まる立場ではないのだ。もちろん、恋情に浮かされただけで、後宮へ戻ってきたわけではない。

皇后になると決めてから、すでに二ヵ月あまり。

その間、何度も自分と向き合い、気持ちを整え、覚悟を積み重ねてきた。国母としての責務を負い、皇帝を支え、後宮を治めなければならぬ、と。

冊使が朗々と唄うように宣読した詔書には、こんなことが書かれていた。皇后は宮廷の秩序と調和を守り、妃嬪たちの模範となり、賢徳をもって内廷をつかさどり、政治を助け、国家の永安を願う存在――

はたして、自分にそれができるのだろうか。

山で育ち、料理以外に能のなかった女が国母に？

冊宝の重みが雪蓉の手の平にのしかかる。

怪力の雪蓉には物理的な重さなどどうということもない。

これは、この舜殷国の民の命運までも預かったような、胸の奥にずしりと落ちてくる責任という名の重さだ。

雪蓉に、国の命運がかかっている。

国を動かしうる権威を手にしてしまった事実には、ぞくりと鳥肌が立つ。

自分に、そんな資格があるのか。

そんな力が備わっているのか。

己に問いかけても、答えは見つからない。

……だが、ここまで来た以上、やれるかどうかではない。やるしかないのだ。能力がないならこれから学べばいい。

力が足りないなら、これから身につければいい。

血反吐を吐くような努力が必要になろうとも、逃げるつもりはなかった。

きつと劉赫も、こうして皇帝という重責と向き合い、戦い続けてきたのだ。ならば自分も、あの人の隣に立つ者として恥じぬ生き方を選ぶだけだ。

国母として、この国を守り抜いてみせる。

雪蓉は殿上に座す劉赫を見上げ、決意を宿した眼差しで静かに見つめた。劉赫もその視線に気づいたようで、二人の目が合う。

まるで戦場へ赴く将のような鋭さを帯びた視線を向けていた雪蓉は、あらためて心に誓う。

（この結婚は、「あなたと共に戦う」という宣言よ。劉赫がどんな思いで皇帝の玉座に座っているのか。その重さを、私もわかち合う）

劉赫が一瞬、わずかに動きを止めたのがわかる。次いで、口元がふっと和らぎ、同じように静かな決意を帯びた光がその目に宿る。

二人は言葉を交わさず、ただ視線だけで語り合った。

——この国を、民を愛し、全身全霊をかけて守っていく。

雪蓉は決意を抱いたまま、静かにひざまずいた。

最高位の九拝を一つ、また一つと捧げるたび、曇りなき天が緩やかに開き、光が糸のように降りてくる。

皇后冊立を天が祝福するかのように、金色の輝きが雪蓉の頭上を優しく照らしていた。



皇后冊立の儀が終わり、ほっと息を吐いたのも束の間だった。

雪蓉は豪華な湯殿へ移され、侍女たちの手で隅々まで身を清められ、紅色の華やかな長裙と、蓮の花が咲き誇る大袖の袍に着替えさせられた。

続いて、就寝のための支度として髪に香油を含ませ、くしで丁寧にとかれる。

これから夜伽用の結い方を施すのだと侍女が説明した。

「寝台で横になっても乱れぬように、頭頂で髪をまとめます。ただし、形は縦長ではなく平たく低い形に……こうすることで、枕に触れても重みが分散され、夜通し形が

崩れません」

それを聞いて、雪蓉は思わず顔をしかめた。

「……寝る時は面倒くさいから、結わずにそのままいた方が良くない？」

雪蓉は化粧台の前に置かれた椅子へ腰を下ろしたまま、鏡越しに侍女へ声をかける。鏡嫌いの劉赫によって後宮や宮廷から鏡が取り払われていたのは、もはや過去の話だ。かつての劉赫は、自分の顔が神龍に見えてしまっていたが、今はそれもなくなり、こうして鏡が設置されている。

「いいえ、娘々。大家の御前では、常に美しくあらねばなりません」

「娘々」は皇后への敬称であり、「大家」は皇帝を指す。

丁寧な物言いにもかかわらず、侍女は毅然とした態度でびしりと雪蓉の意見を退けた。

それが雪蓉を嫌つてのことではないのは、よくわかっている。むしろ、大好きすぎるがゆえに苦言を呈してくるのだ。

自分のために必死で働いてくれる侍女たちに強く言い返せるはずもなく、雪蓉は観念して、されるがままに身を預けた。雪蓉は女子どもにとにかく弱い。

貴妃だった頃は疎まれて放置され、好き勝手に過ごしていたが、これからはそうも

いかなくなるだろう。

「劉赫は慶賀の儀で、まだ諸王百官と祝杯をあげているのでしょうか？ 私には用意があるから先に退出できたけど……飲みすぎて、すぐ寝てくれないかしら」

「なにをおっしゃいますか！ 今宵ほど大切な夜はございませぬ。どうか立派なお世継ぎを！」

あまりに直球すぎる物言いに、雪蓉の口の端がびくりと引きつる。

侍女が心の底から良かれと思つて言っているのがわかるだけに、あからさまに拒否することができない。

「ああ……気が乗らないなあ」

思わず大きなため息と共に本音が漏れる。

皇后として国のために尽くそうと決意したとはいえ、それとこれとは話が別だ。もちろん、お世継ぎを産むことが重大な務めだということは理解している。

それでも……頭では理解していても、心はまだ追いついていなかった。

「大丈夫ですよ、娘々。最初は痛いことは痛いですが、慣れれば案外平気なものです」

髪をとかしていた侍女が、妙に物知り顔でそう言う。

「えっ!? あなた、経験があるの!？」

雪蓉は思わず大声を上げ、髪をとかしてもらっている最中にもかかわらず、後ろを振り返った。

「娘々、動かないでくださいませ！ 御髪おぐしが抜けてしまいます！」

「いいのよ、髪が抜けるくらい。多いくらいなんだから、ちょうどいいわ」

「良くありませんっ！」

ぴしゃりと言われ、雪蓉は洪々正面を向き直る。

「こんなお綺麗な髪、見たことありませんもの。これからは寶石のように大事になさってくださいまし」

小言を交えながらも、侍女は丁寧な髪をとかし続ける。

……なんだか、はぐらかされたような気がする。

先ほどの質問の答えは曖昧なままだが、これ以上は聞かない方が良く、ということなのだろうか。

雪蓉は尋ねるのをあきらめて、今夜のことを考えることにした。

そもそも、雪蓉には夜の営みの知識がほとんどない。

巫女姉たちは雪蓉が十歳の頃に次々と嫁いでしまい、そういう話を聞く機会もな

かった。

痛いのかどうかすら知らないのだ。知らないことほど怖いものはない。

「……痛いのかあ」

ぼつりと本音が零れる。

痛みには強い方だと思っている。

だが、事故でふいに腕の骨を折るのと、これから折ると告げられてその瞬間を待つ
のでは、まったく意味が違う。

侍女は薄く微笑み、頭の後ろで蝶のように髪を結い上げ、残りはやわらかく流して
整えてくれた。

寝台で邪魔にならぬよう、髪飾りは控えめにしてある。

自分では到底できない見事な仕上がり、雪蓉は思わず感嘆の息を漏らしたの
だった。

こうして美しく着飾られた雪蓉は、臥室^{しんしつ}で劉赫を待っていた。

皇后宮の最奥、皇帝の居所に最も近い場所に寝宮はある。

朱を基調にした帳が四方に垂れ、細かな刺繍や貴金属の装飾が灯火を受けて金の

粉のように瞬いている。

宝床は高い台座の上に置かれ、二人が横に並んでも余りあるほど大きい。黒檀^{こくどん}の縁
には鳳凰が刻まれ、天蓋の内側には薄絹が重なり、静かにゆらめく。

香炉に焚かれた麝香^{じやこう}の香りがふわりと漂い、遠くの鼓樓^{ころう}から時刻を告げる太鼓の音
がした。

（落ち着け、落ち着くのよ、私……）

もうすぐ皇帝がお出ましになる、と告げられ、侍女たちは音もなく下がっていった。
誰かが側についてくれれば緊張もいくらかまぎれたのだろうが、一人になると途端に
思考が暴れ出す。

（大丈夫、どうってことない。霊獣と生身で戦うのに比べたら、きつと簡単なも
のよ）

たとえが一般的でないことは自覚しているが、実際に雪蓉は饗餐と戦った身だ。

それに、つい先ほど諸王百官の前で皇后冊立の儀を終えたばかりである。あれは緊
張で手が震えてもおかしくない大舞台だった。

にもかかわらず、今の方が、どういうわけかはるかに緊張している。

饗餐と戦った時よりも、冊立の儀よりも胸の鼓動が速い。

今から霊獣と戦うか夜伽をするか選べと言われたら、迷いなく戦う方を選ぶ自信がある。

なぜこんなに怖いのか、自分でも理由がわからない。

劉赫のことは好きだ。好きだけれど、それだけで割り切れる話ではない。

得体の知れない怖れが体にまとわりついて、雪蓉は人生で一番の緊張に吞まれていた。

（落ち着いて、私……大丈夫よ……）

同じ言葉は何度も胸の内では唱えながら、両手を固く握りしめ、深呼吸を繰り返す。もうすぐ劉赫が訪れると告げられたのに、先ほどから来る気配がまったくない。

一息ごとの刻がやけに長く感じられる。

こんな緊張の時間を過ごすくらいなら早く来てほしい。

そう思う一方で、やっぱりまだ来ないでほしいという気持ちも同じくらいある。

胸の中で相反する思いがぐるぐると渦を巻いていたその時、臥室の外で、慌ただしい衣擦れの音が聞こえ始めた。

皇帝のお出ました。

（ああ……来ちゃった！）

雪蓉は思わず臥室の中をうろうろと歩き回り、ドスドスと床を鳴らす。

「……雪蓉、入るぞ」

扉の外から低く甘い声がかげられた。

雪蓉が緊張のあまり返事ができずにいる間に、扉がそとと開く。

現れたのは、龍の刺繍が施された絹の寝衣をまとった劉赫だ。

威厳ある佇まいのまま室内を一瞥した劉赫は、すぐさま眉をひそめる。

「……お前はなにをしている」

壁際で、まるで蜥蜴トカゲのように張りついていた雪蓉は、気まずい思いでぱちぱちと目をしばたかせた。

「……あら、ごきげんよう」

ごまかすように姿勢を正し、雪蓉は何事もなかったかのように歩み寄る。

だが――

「すました顔だが……右手と右足が同時に出ているぞ」

劉赫はあきれ半分の声で指摘する。

「……そう？ 私はいつもこんな歩き方だけど？」

そんなわけない、ということは自分でもよくわかっている。

突っ込む氣力がそがれたのか、劉赫は深くため息を吐き、静かに部屋の中へ足を踏み入れた。

「どこに腰かければいい？」

部屋を見渡しながら、劉赫が静かに尋ねた。

「どこでも。好きなところに座るといいわ」

雪蓉がそう答えると、劉赫は背もたれつきの椅子には目もくれず、寝台に腰を下ろす。

（……わざわざそこ?）

どこでもいいと言った手前、今さら別の場所を勧めるわけにもいかない。

そうなると今度は、雪蓉がどこに座るべきかで頭を抱えることになった。

劉赫の隣——それが一番自然、なのだが。

迷いに迷った末、雪蓉はそっと床に腰を下ろした。

「……なぜ、そこに座る」

寝台から見下ろす角度から問いかけられるが、雪蓉は顔を背けて口を尖らせる。

「別に。私は床が一番落ち着くの」

劉赫は、はあと大きなため息を吐き、悩ましげに前髪をかき上げた。

その仕草がやけに艶めいて見え、雪蓉の胸がどくりと跳ねる。

「皇后になって、不便はないか？」

「まったくないわ。貴妃だった頃でもこんなに贅沢していいのかしらって思っていたのに、今はさらに突き抜けた感じ。しかも侍女もたくさんいるし」

「以前は女官たちが怯えて近寄れなかったからな。身分の高い者を配置しても、世話をしなければ意味がない。今回は身分を問わず希望制にしてみたが、案外良い者たちが集まったらしいな」

「ええ、とっても良くしてもらっているわ。皆と仲良くできそうで嬉しい。それに銘々もいるし……」

「銘々？」

「そう。貴妃の頃に下女として働いてくれた子なの。……あれ、そういえば皇后冊立の儀の時は姿を見なかったわね。どうしたのかしら」

皇后冊立という大きな儀式だからか、侍女の配置が慌ただしく入れ替わっていた。銘々は別の持ち場を命じられていたのかもしれない。

「そうか。知っている者がいるというのは心強いな」

劉赫は小さく頷き、穏やかに続ける。

「後宮にはいまだに雪蓉に対して反発する者もいるが、とても慕っている者もいると聞く。饗餐襲来の折の働きが大きかったのだろう」

雪蓉は、侍女たちに迎えられた時のことを思い出した。
黄色い歓声を上げてはしゃぐ彼女たち。慕われているのは感じるが、ちよつと過剰な気がしないでもない。

「それと、今回雪蓉が皇后になるにあたって、後宮の体制を強化することにした。宰相と話し合い、宦官制度を復活させ、さらに妃の数も増やした」

劉赫の言葉に、雪蓉はようやく腑に落ちた。

「後宮に宦官がいたのはそのためだったのね。……でも、どうして？ 宦官は嫌いなものではなかったの？」

「宦官が嫌いなのではなく、宦官制度が嫌いなのだ。男性根を取らねばならないのは非人道的だろう。それに、権力欲しさに宦官になる者も多く、後宮の妃と通じたり賄賂を横流しにしたり、汚職の源になりやすい」

宦官とは、去勢によって後宮に仕えることを許された男性のことだ。

男子禁制の後宮に出入りできる存在であり、妃や女官の身の回りの世話、文書の取次、命令の伝達など、裏方として欠かせない役目を担う。

劉赫はやや感情的になりながら一息に言ったあと、少し声を落として続けた。

「……それにより、後宮を潰したかった。数多の妃のもとへ通うなど、種馬のようで嫌だろう。後宮をなくすために、まずは宦官を一掃することから始めようと思っただが、今は雪蓉がいる。だから後宮は存続することにした」

「……私のため？」

問い返すと、劉赫ははっきりと頷いた。

「ああ。皇后は後宮を統べる最高権力者だ。後宮の力が皇后の強力な後ろ盾となる」

「なんだか荷が重いわ。私に後宮をまとめることなんてできるのかしら。ただでさえ嫌われているのに」

雪蓉は小さく息を吐く。

自分に向けられる期待の大きさに、胸の奥が重くなる。

「後宮は政治にも密接に関係している。他国との関係強化や礼制の象徴、それに女性にとっては出世できる専門職の道が開かれるからな。こうした事情があり、かろうじて存続させてきたわけだ。宰相たちも後宮の力を強めることには賛成してくれたよ。利点が大きいんだ」

「なるほどね。そう言われると仕方ないような気がしてくるわ。皇后として、もっと

責任感を持って国のために働かないと」

理屈としてはたしかに理解できるので、雪蓉はゆつくりと頷いた。すると、劉赫がじつと雪蓉を見つめる。

「覚悟を決めたんだな」

「決めるしかないじゃない。やってやるわよ。歴史に名を残す賢母になってやるわ」雪蓉が真つ直ぐに言い切ると、劉赫は静かに微笑んだ。

「歴史に名を残す賢母か。さすが雪蓉、言うことがでかいな」

「やるならとことんやりたいの」

雪蓉のやる気に満ちた言葉に、劉赫は目を細めた。

「皇后冊立の儀の折、良い目をしていた」

その時の光景を思い返すように、劉赫はぼつり（おや）呟く。

「……あなたもね」

二人は闘志を宿した瞳で見つめ合い、そして微笑み合う。

皇帝と皇后として、この国の未来を背負う覚悟をたしかめ合うように。

「……それはそうと、妃たちの数が増えることが、どうして後宮の強化に繋がるの？」

雪蓉が小首を傾げて問う。

「妃嬪が増えるということは、それだけ多くの家と縁を結ぶということだ。名門や豪族を味方につけることができる」

そして、劉赫は一拍置いてから続けた。

「後宮は贅沢のためにある場所ではない。国を内側から守るための、もう一つの政だ。そして、妃たちを上手くまとめることができれば……それは、雪蓉にとつて強い後ろ盾になる」

その言葉から、劉赫が雪蓉の事を思つて動いていることが、はっきりと伝わってきた。身分も後ろ盾もない雪蓉に、味方を作ろうとしてくれているのだ。

その気持ちはありがたい。

けれど同時に、胸の奥にかすかなざわめきが生まれる。

「……通わないわよね？」

心配そうに問うた雪蓉に劉赫は目を見開き、次いで大きく口を開けて笑った。

「通うはずがないだろう。俺は約束を守る男だ」

「でも、そうなるど私は妃たちから恨まれることになるわ。それに、花の時期を誰からも愛でられずに終えるのはかわいそう……」

雪蓉は目を伏せて言った。

自分が嫉妬深いばかりに、妃たちに悲しい思いをさせるのは忍びない。

劉赫はそんな雪蓉を黙って見下ろしていたが、やがて立ち上がって、雪蓉の前に膝をついた。

「国の頂点に立つというのはそういうことだ。全ての者を幸せにすることはできない。己の未熟さに打ちのめされる日々ばかりだが、それでも前に進まなければいけない。より多くの者を救うために」

劉赫は熱い眼差しで雪蓉を見つめ、彼女の頬に触れた。

雪蓉は劉赫の言葉の深さを考える。

目の前の石をどけることに気を取られ、その先の川を見なければ流される。

妃たちの女性としての幸せも大事だが、この国には明日の食料にさえ困っている民衆が多くいるのだ。現に、雪蓉の父も、雪蓉を育てることができずに饕餮山に捨てた。国家の安寧や他国との平和維持のために後宮が存在しているのだとしたら、大局を見なければ結局は誰も救えない。

後宮を統べる立場となるのなら、妃たちの幸せも雪蓉次第だ。

皇帝からの寵愛だけが幸せではない。きつと別のなにかがあるはずだ。

「……私は甘いと言われようが、誰一人として見捨てない」

雪蓉は力強い目で劉赫を見つめた。

ふっと笑った劉赫が熱い眼差しを返してくる。

「……それでこそ雪蓉だ」

そう言うと、劉赫はそっと顔を近づけてきた。

まぶたを少しずつ閉じながら徐々に近づいてくる顔に、雪蓉の胸が大太鼓のように鳴り響く。

（え、待って……これって……これって……）

突然訪れた甘い展開。

政治の話をしていたのですっかり忘れていたが、今宵は初夜なのだ。

皇后として最も大事な仕事、ひいては後宮の意義——それは皇位継承者を産むことだ。

（わかってる！ わかってるけど……！）

心が追いつかないのだ。

雪蓉は固く目をつぶり、唇をぎゅっと引き締めた。

身を強張らせながら待ち続けるも、一向に劉赫の口付けはやってこない。

（……あれ？）

おそるおそる目を開けると、劉赫と至近距離で目が合った。

「え……あ、あの……」

あまりの気まずさに声をかけると、劉赫が顔を離す。

体が遠ざかったことに安心して、雪蓉は大きく息を吐いた。

「……別に、無理強いすることではない」

劉赫は片方の手を床につき、立てた膝に腕を緩く預けて言った。

ため息交じりに零された言葉は、どこか色っぽい。一度火がついた熱を、どこか持て余しているかのようだ。

「それって……」

「雪蓉の気持ちが整うまで待つということだ」

気だるげに襟足をかきながら吐き出された言葉は、どこか投げやりにも聞こえる。

「いいの!？」

思わず雪蓉は目を輝かせて身を乗り出す。

すると劉赫は嫌そうに眉をひそめながら言った。

「……ああ。そもそも、最初は体のどこも触れては駄目だとまで言っていたほどだからな。急にそういう気持ちになれと言われても無理なのは理解できる」

雪蓉は貴妃になった際、劉赫を牽制するためにそう言い放ったことを思い出す。

劉赫の想いにもてんで気がついていなかったし、もともと雪蓉は色恋沙汰に疎いのだ。

「ありがとう……私、いろいろと学ばなきゃいけないことが多いみたい。これまで山暮らして同年代の子と会話したことすらなかったから、正直恋愛はよくわからないの。もともと結婚する気もなかったし、恋という気持ちがどんなものかさえわからなかった」

雪蓉はぼつりぼつりと自分の気持ちを吐露する。

それを劉赫は真剣な顔で黙って聞いていた。

「劉赫への想いがついたのだって、結構な時間が経ってからだし、劉赫の側にいられるのは嬉しいけれど、もっと段階を踏んでいきたい」

雪蓉の素直な気持ちを聞いて、劉赫はやわらかく微笑んだ。

「……そうだな。それが普通だ。ゆっくり進んでいこう」

劉赫はそつと雪蓉の頭に触れると、まるで小さな女の子をあやすかのように優しくなでた。

安心した雪蓉の顔に、本来の明るい笑みが戻る。

「はあり、安心したら眠くなっちゃった。もう夜も遅いから寝ましょう」
 そう言って雪蓉は寝台に滑り込んだ。

上質な絹の掛け布団に包まれて寝ようとする雪蓉を、劉赫はあきれた顔で見下ろす。

「……あのなあ。もう少し男というものを知ってくれ」

「え？ どういうこと？」

劉赫は前髪を乱暴にかき上げて、大きく息を吐き出した。

「……そうだな。それが雪蓉だよな」

そう言って掛け布団をめくり、劉赫も寝台に横たわった。

二人は、互いに顔を見つめ合いながら横になる。

「まるで幼子と一緒に寝るようだ」

「なによ、仕方ないじゃない。山育ちなんだから」

「山育ちだけが原因ではないと思うが……」

雪蓉はふと、恋愛話が大好きな小さな巫女たちのことを思い出す。

おませな子たちね、と思っていたが、おかしいのは雪蓉の方だったのかもしれない。

「……そういえば、味覚はどうなったの？ 前に饕餮山に来た時は、『味覚は取り戻したけど、なにを食べても不味い』と言っていたわよね」

「ああ。味覚自体は、あの時すでに戻っていた。ただ、なにを食べても美味^{おいしい}とは思えなかった。だが……雪蓉が戻ると聞いてからだ。ようやく、美味^{うまい}と感じるようになった。精神的なものだったのだろう」

「そう、それは良かったわ」

あまりに眠くなった雪蓉はまぶたを閉じながら言う。

「……だが、雪蓉の料理が食べたい」

劉赫の甘えるような言葉に、雪蓉は目を瞑ったまま笑みを浮かべる。

「もちろん、作ってあげる。夜食を楽しみにしていてね」

「ああ、毎晩来る」

「ええ、待ってる……」

雪蓉はそれだけを言うと、眠りに落ちてしまった。

今日は慌ただしい一日だった上、慣れない儀式への緊張で心身共に疲れ切っていたのだ。

結局、皇后としての務めである夜伽は果たせなかったわけだが、雪蓉の胸は満ち足りていた。

愛する人と共にいられる喜び。

雪蓉は恋に關してはまだ幼く、男女の結びつきがもたらす深い悦びを知らない。ただ寄り添い、同じ時間を過ごせるだけで満足してしまう。

だから——劉赫がそんな純真な雪蓉を前に悶々と夜を明かすことになるのは、夢にも思わない。

皇帝の片想いじみた苦悩は、もうしばらく続きそうである。

第二章 皇后の壁

「雪蓉様、お食事をお持ちしました！」

劉赫が朝廷へ行き、雪蓉が朝の支度を終えて寛いでいたところへ、銘々の明るい声が響いた。

開け放たれた扉から、大きな御膳を抱えるようにして入ってくる小柄な侍女。

背丈に合わない御膳にすっぽり隠れて、見えるのは頭頂部の二つのお団子髪だけだ。(……前、見えているのかしら?)

雪蓉が心配したその瞬間。

「ああっ！」

段差などない場所で、銘々は見事につまずいた。

大きな御膳がふわりと宙へ舞い上がる。

雪蓉はとっさに飛ぶような動きで御膳を片手で受け止め、もう片方の手で床に顔から突っ込みそうになっている銘々の体を支えた。

完璧な救出劇に、側に控えていた侍女たちが思わずといった様子で拍手する。

雪蓉は御膳の中身が崩れていないかたしかめ、次いで銘々の顔を覗き込んだ。

(うん、どちらも無事ね)

ほっとしたのも束の間——

片手で支えられていた銘々の瞳がみるみる潤み、やがて大粒の涙がぼろぼろと零れ落ちた。

「うわぁーん！ ごめんなさい、雪蓉様……またやってしまいましたー！」

突然泣き出した銘々に、雪蓉は困ったように眉を寄せる。

近くにいた侍女がそっと近づき、雪蓉の手から御膳を受け取って卓子へ置いてくれた。

手が空いた雪蓉は、銘々の背中を優しくなでる。

「そんなに泣かなくても大丈夫よ。御膳は無事だったじゃない」

「……でも、私は失敗が多いから、大事な冊立の儀に呼んでもらえなかったんです。雪蓉様のお役に立ちたくて、張り切っていたのに……またやってしまっただけ……！」

ああ、だからあの時いなかったのか、と雪蓉は納得した。

周囲の侍女たちは気まずさからか雪蓉と目を合わせない。銘々だけ外したことに罪悪感があるのだろう。

やる気だけは人一倍なのに空回りしてしまう彼女には気の毒だが、冊立の儀のような重要な場から外した判断は賢明だった。

決して意地悪ではなく、後宮の運営を守るための処置だ。

有能な侍女たちに、雪蓉は内心で感謝する。

「気にすることないわ、銘々。失敗は誰にでもあるものよ。……でも、この御膳はあなたには少し大きすぎるわね。前が見えなくて危ないもの。別の役目をお願いした方が良さそうだよ」

「申し訳ありません、雪蓉様。私、一生懸命働きますから……どうか、免職だけは……！」

「なにを言っているの。これぐらいで免職になんてしないわ。ほら、涙を拭いて」

雪蓉が銘々を立たせると、侍女が手巾しやうめんを渡して銘々を下がらせた。

銘々以外は本当に有能な侍女ばかりで、雪蓉はあらためて感心する。

もともと、銘々の天然ぶりも、雪蓉にとってはただただ微笑ましいだけだ。驚くほどよく転ぶ子だとは思いますが、嫌悪感はない。

静けさが戻った部屋で、雪蓉は椅子に腰を下ろし、卓子に置かれた御膳へ視線を向けた。

「うわあ……これはまた、とても豪華ね」

目を輝かせながら、彩り豊かな料理に見入る。

小さな器に品よく盛りつけられた料理は十種以上。鮮やかな色彩が花のように咲き誇り、まるで絵画のように美しい。

（鸞朱らんしゅが、料理は芸術だと言っていたけど……たしかにその通りね）

鸞朱とは、後宮の饗宮房きやうくわうぼうを束ねる料理長だ。

女性で唯一、宮廷料理に携わることを許された一流の料理人。

以前雪蓉の料理を辛辣しんけんに批判していたが、こうして本物の宮廷料理を目にすると、彼女の言葉は嘘ではなかったとわかる。

器の配置も盛りつけの彩りも食材の形も、全てが計算し尽くされている。

雪蓉は、御膳の中でも一際輝く宝石のような点心を箸でそつと摘まんだ。透き通る薄皮は水晶のように澄み、中の餡は翡翠色。さらによく見ると、中心には細かく刻んだ柑橘の皮が金糸の星屑のように散っている。

一口含めば、薄皮が舌の温度でとろりと溶け、翡翠色の餡の優しい甘さがふわりと広がる。

嚙下したあとには、爽やかな柑橘の香りが余韻としてほのかに残った。

「……素晴らしいわ」

思わず零れた感嘆。

妃たちは饗宮房の料理を口にするが、皇后は皇帝と同じ宮廷料理を味わう。

想像のはるか上を行く料理に、雪蓉はすっかり心を奪われた。料理は五感で楽しむもの、という鸞朱の言葉が、ようやく腑に落ちる。

これを自分でも作ってみたい、と胸が高鳴った雪蓉は、侍女に皇后宮の厨房が使えるかどうか尋ねた。

侍女が「すぐにご用意いたします」と答えるのを聞き、雪蓉はゆつくりと朝の御膳を味わった。



朝餉を終え、厨房へ向かう廊下で、宮殿の掃除をする銘々の姿が見えた。

先ほどの失敗を挽回しようとしているのか、一心不乱に壁を磨き続けている。

（しっかり働いているのね。偉いわ）

そう思った矢先、廊下の卓子に飾られていた大きな壺に銘々の腕が当たり、壺がゆつくりと倒れ始めた。

——危ない！

雪蓉は光のような速さで床に落ちかけた壺を受け止める。

銘々の体の半分ほどもある大きな壺だ。見るからに高級品で、もし割れば銘々は免職はおろか、借金漬けになりかねない。

「ああ、危なかったわ……」

雪蓉の声でようやく気づいた銘々は、真っ青な顔で頭を床に擦りつける。

「またやってしまいましたっ！ 大変申し訳ありません！」

雪蓉は壺を元の位置に戻し、苦笑しながら告げた。

「大丈夫よ。どこも壊れていないわ。……今後、高級な調度品を無駄に飾るのはやめ

ましよう。掃除も大変だし、うっかり壊してしまったら困るもの」
控えていた侍女が頷き、壺と卓子を片付け始める。

「……私は本当になにをやっても上手くできなくて……いっそのこと、いなくなった方がいいのかもしれない」

銘々は座り込み、肩を落として床を見つめた。相当落ち込んでいるようだ。

「そんなこと……」

雪蓉はそこまで言いかけて、口を噤んだ。

（これだけうっかりが多いと、いつかばい切れない失敗をしかねないわね……。それなら、いっそのこと――）

「銘々、私付きの侍女になりなさい」

「……へ？」

顔を上げた銘々の頬は涙と鼻水でぐっしより濡れていた。その間の抜けた顔に、雪蓉は思わず噴き出してしまふ。

「私からひと時も離れてはいけないわよ。わかった？」

「……は、はいっ！」

銘々は慌てて立ち上がり、雪蓉の後ろに控えた。

雪蓉と行動を共にする選りすぐりの侍女たちは、「なぜこの子が？」という表情で銘々を見つめている。

（目を離すと心配なもの。側に置いていれば、事が起こる前に防げるわ）

雪蓉は困っている者を放っておけない性分だ。たとえそれが、自分の負担になるとわかっていても。

こうして雪蓉は、新たに銘々も加えたお付きの侍女たちを従え、厨房へと向かった。

回廊を渡った先の別棟に、厨房があった。

しかし、侍女たちが慌ただしく入り口を出入りしている。

（どうしたのかしら？）

訝しみつつ近づくと、雪蓉に気づいた侍女たちが一斉に頭を下げた。

「申し訳ございません！ まだ、とても使える状態ではなく……」

「そんなことで謝らなくていいわ。どういう状況なのか、見せてくれる？」

雪蓉が厨房へ足を踏み入れると、侍女たちが忙しそうに動いていた理由がすぐにはわかった。

厨房の外側は立派だったが、中は長らく使われていなかったようで、かなり荒れ果

てていた。棚は埃をかぶり、調理台にはひび割れが走り、かまど竈の中には古い灰が残っている。

なんとか掃除をして使える状態に整えようとした跡は見受けられるが、たしかにすぐにどうにかできる状態ではない。

全てを綺麗に整えるには、どう見ても数日はかかりそうだ。

「これは……なかなか掃除しがいがあるわね」

雪蓉が厨房の中にあつた箒を手に取り眩くと、侍女たちは一斉に真っ青になって首を横に振った。

「まさか娘々が自ら清掃なさるなんて、とんでもございません！ 我々がやりますので、どうかお部屋でお休みくださいませ！」

「なに言ってるのよ。人手は多い方がいいに決まっていますでしょう？ さあ、銘々、やるわよ」

「はいっ！」

銘々が飛び跳ねるように返事をする、雪蓉はにこやかに箒を手渡した。

そして自身は持ち前の怪力を生かして、重たいものをひよいひよい外へと運び出し、こびりついた灰も容赦なくこすり落としていく。

こうして雪蓉の奮闘により、古ぼけていた厨房はあれよあれよという間に生氣を取り戻したのであった。



日が暮れるまで働いたおかげで、厨房は見違えるほど綺麗になった。

ただ、調理器具は新しいものを買ひ揃えるべきだと侍女たちが言い張るので、本格的使用できるようになるのはもう少し先になりそうだ。

それはいいとして――

（銘々のそそっかしさは、どうにかならないのかしら）

掃除の最中もなにかにつまずいたり、ぶついたり、転びかけたりと常に危なっかしい。

怪我になりそうところは雪蓉がすんでのところで助けているので問題ないが、今までよく無事で生きてこられたものだ、むしろ感心してしまう。

もつとも、本人が一生懸命なのはよく伝わってくるので、他の侍女たちもあきれつつも温かく見守っている。